永井荷風の渡米

――新出・船中書簡を通して――

岸川　俊太郎

一、荷風の渡米

一九〇三（明治三六）年九月二二日、永井荷風を乗せた日本郵船の信濃丸は横浜港を出帆、アメリカ大陸を目指した。約二週間の太平洋上の航海を経て、一〇月五日、カナダのヴィクトリア港に入港、七日にシアトルに到着した。アメリカの地を踏んだ荷風はシアトル、タコマ、セントルイス、カラマズー、シカゴ、ニューヨーク、ワシントンなどに居を移しながら西海岸から東海岸へと旅を続けた。荷風のアメリカ滞在は三年九ヶ月余りに及んだ。一九〇七（明治四十）年七月一八日、ニューヨークから大西洋を横断しフランスに渡り、約八ヶ月をリヨンで約二ヶ月をパリで過ごし、一九〇八（明治四一）年七月に帰国した。帰国後すぐに刊行された『あめりか物語』（博文館、一九〇八年八月）は、自然主義文学が隆盛を誇っていた文壇に新たな風をもたらした。

末延芳晴が「旅そのものを「書く」ことのために対象化した所に、『あめりか物語』と『西遊日誌抄』の新しさがあった」と指摘するように[1]、荷風の洋行の特徴は、荷風が自身の洋行を作家の眼差しで捉えていた点に

ある。荷風はすでに小説『野心』（美育社、一九〇二年四月）、『地獄の花』（金港堂、同年九月）、『夢の女』（新声社、一九〇三年五月）を上梓し、エミール・ゾラの翻訳『女優ナヽ』（新声社、同年九月）を手掛けるなど、作家への道を着実に歩み始めていた。

作家の眼差しを持つということは、異郷で経験したことのすべてが創作の対象になりうることを意味する。実際に荷風はアメリカ各地の滞在先で作品を執筆し、それを日本の雑誌に積極的に発表していった。もっとも、作家としての荷風の眼差しはアメリカ・フランス滞在を通じて一貫していたわけではない。荷風の創作意識は異郷での生活の中で揺れ動き、変容していった。なかでもアメリカに滞在して間もない頃の荷風は、日本で培った作風に行き詰まり、深刻な創作不振に陥った。荷風は異郷での様々な経験を通して自身の文学表現を見つめなおし、スランプを乗り越えていった。アメリカを舞台とした二一篇の作品を収録した『あめりか物語』には、荷風が試行錯誤を重ねながら作家として成長していく文学的道程が刻まれている。

このように、外遊中の荷風がその時々に抱いていた創作意識と作品の間には密接な関わりがある。外遊中の荷風の生活は小説執筆と並行して綴られた日記によって窺い知ることができる。これは後年、「西遊日誌抄」として発表されたが[2]、そこには航海中の記述は残されていない。記されているのは横浜港を出航した日の九月二二日と、約二週間の航海を経てカナダのヴィクトリア港に到着した日の一〇月五日の記述だけである。航海中の荷風の行動についてはこれまで不明瞭な点が残されていたのだが、それに光を当てる一次資料が近年発見された。それが船中で執筆された荷風書簡（巌谷小波宛、一九〇三年一〇月五日付）である。渡航中に書かれた書簡はこれまで見つかっていない。今のところ外遊時代の荷風の最初の書簡であり、渡航中の荷風の生活を知ることができる貴重な資料といえる。本稿では、アメリカでの生活を間近に控えた荷風が船中でどのような心境にあったかを書簡を手掛かりに明らかにしながら、滞米初期の荷風の創作意識と作品との関わりについて

考察したい。

二、船中で書かれた新出書簡

新出書簡の宛名である巌谷小波（本名・季雄）は、尾崎紅葉、山田美妙らが創立した硯友社に参加した後、童話『こがね丸』（一八九一）によって名声を得て、児童文学の領域で長きにわたって活躍した作家である。小波は当時、作家志望の若者たちが集う文芸研究会・木曜会を主宰しており、荷風も会員の一人であった。主な会員に黒田湖山、久留島武彦（尾上新兵衛）、赤木巴山、西村渚山、生田葵山、押川春浪らがいた。[3]「西遊日誌抄」の一九〇三年九月一七日の項に「木曜会諸子余の為めに離宴を清水谷開香園に開く 此夜恰も二十六夜に当る。」とあり、また、九月二二日の項に「郵船会社汽船信濃丸にて横浜港を発す 余の行を送らるゝもの小波先生春浪漁史渚山湖山葵山其の他二三子なり。」と記されているように、小波をはじめ木曜会の仲間たちが荷風を送り出すために集まっていたことがわかる。

新出書簡の冒頭で荷風はその時の心境を「出達の際はわざ〳〵新橋までお送り下され有難く存じ候。横浜にて信濃丸甲板上に春浪子と手を別ち候ふ時には一種異様なる感覚を経験致し候。是等を人生別離の情とでも申すなる可きか。」と印象深く綴っている。荷風と木曜会との交流は外遊時代も途切れることなく、荷風の異郷での創作活動の大きな支えとなった。外遊中に執筆した作品の雑誌掲載や『あめりか物語』の出版に力を貸したのも小波であった。

新出書簡の封筒には手書きの英字で「Via S. Frisco.」（サンフランシスコ経由）と記されている。サンフランシスコの消印は一九〇三年一〇月九日、東京での消印は一一月二日となっている。

四

荷風はこの書簡の大部分を「十月一日午後」に書き上げた後、日を空けて数行を書き加え、書簡末尾に「十月五日夕」と日付を入れている。あらためて確認すれば、荷風が横浜を出発したのは九月二二日、カナダのヴィクトリア港に到着したのが一〇月五日夜、シアトルに到着したのが一〇月七日である。横浜を出発してから十日ほど経った船中で荷風は手紙の筆を執ったことになる。書簡末尾に記された日付（一〇月五日）はヴィクトリア港に到着した日付と合致している。一〇月五日の「西遊日誌抄」には次のようにある。

> 此日午後甲板に出づれば遥に山影を認得たり　此悦び譬へんにものなし。事務長の話には今夜加奈陀のヴイクトリヤ港に着すべしとの事なり　手紙あまた認(したた)むる中早くも夜となりて一声の太き汽笛と共に船は港に入りぬ。されど検疫済まぬ為め一夜を沖合に明かす事となれり。此時天次第に晴来りて玲瓏たる明月茫々たる江湾を照す前方にはヴイクトリヤ港の燈火天上の星と相乱れ月中異郷の山影は黒く怪物の横るに似たり。嗚呼余の身は遂に太平洋の彼岸に到着せるなり。

荷風はヴィクトリア港への入港が迫った船の中で多くの手紙を認めたと日記に記している。この時に書かれた書簡の一通が今回発見されたと考えられる。

以下、便箋五枚に及ぶ新出書簡を読み解いていきたい。まず、書簡の冒頭部分には次のような興味深い記述が見られる。

> 最初は三等で行くなぞと申し居り候ひしが、船へ行つて見ると、事務長始め其の他の者も皆丁重に待遇し呉れる為め、否応なく上等船客と相成り申候。

この記述が重要なのは、荷風が何等の船客であったかについては曖昧な部分が残されていたからである。これまで荷風は一等船客として渡航したと考えられてきたが、[4] この点について、宮永孝は横浜で発行されていた英字新聞「The Japan Weekly Mail」に掲載されている「乗客欄」（Passengers）の情報から、荷風が二等船客として乗船していたことを指摘している。[5] 新出書簡はこの齟齬を解きほぐす重要な手掛かりを与えてくれる。すなわち、新出書簡を踏まえれば荷風は二等船客として乗船したが、信濃丸の事務長の計らいにより一等船客の待遇を受けたということになる。[6] 宇佐美昇三は近年の著書において、「船室夜話」の船の描写と信濃丸の船内の構造を比較し、「私」の船室が実際の一等船室と一致している可能性が高いことを指摘している。[7] 荷風の父、永井久一郎は当時、日本郵船の横浜支店長を務めていたので、久一郎があらかじめ事務長に話をつけていた可能性も考えられる。

こうして「上等船客と相成」った荷風が快適な船旅を過ごしたことは、書簡の次の記述から窺うことができる。

> されどいよ〳〵波止場を離れ候ふてよりは寧ろ気軽く愉快なる心地と相成り、面白き前途の空想にのみふけり申候。船中に於ける小生の生活は愉快に且つ贅沢なるものに有之候。（中略）且つ其の上にも此の船の事務長は以前よりの知己なりしを以て何かに便利多く、此の人の紹介にて小生は船客諸氏とも直ぐ懇意になり、毎日食堂喫烟室等にて愉快なる談話をなす（小生の花柳談もなか〳〵の愛嬌となり居れり。）其れが為めか、小生は日本に居る時よりも聊か交際的の人物に相成りしが如き心地致され候、或夜の如きは音楽室にて尺八の一曲を吹奏し、一同無聊に苦しむ折の事とて意外なる賞賛を博したる事も有之候。

こうした荷風の船中での生活を日本郵船に関する諸資料によって捉え直したい。日本郵船株式会社総務部弘

報室編『七つの海で一世紀　日本郵船創業一〇〇周年記念 船舶写真集』（日本郵船株式会社、一九八五年一〇月）によれば、信濃丸は欧州航路用の予備船として一九〇〇年四月に竣工、欧州航路に就航した後、一九〇二年から米国航路（シアトル線）に配船された[8]。建造所はイギリスのデビット&ウイリアムヘンダーソン社、総トン数は六三八八トン、長さ（全長）は一三五・六三五メートル、幅は一四・九九六メートル、航海速力は一一・九ノット、船客定員は二三八名であった。信濃丸は荷風が渡米した当時、日本郵船が保有する船舶のうち最も大きなものの一つであった。

一柳松庵編『増訂 渡米之栞』第四版（一九〇四年一二月）は、カナダ・ヴィクトリア経由シアトル線に就航する日本郵船の船舶の特徴について次のように記している[9]。

> 各船々室は一等、特別三等、及三等の三種とし其設備総べて最新式に憑る　就中信濃丸加賀丸及伊予丸の三艘は最近の建造に係り船体頗る雄大にして構造亦堅牢なれば船体の動揺甚だ少く且つ其一等室の構造及び設備は空気の流通に注意し暖室器、洗面器、抽出附机を備ふる等船客の快楽及ひ安全に資する施設殆んと遺す所なし

このように、信濃丸は「雄大」かつ「堅牢」な船体と最新式の設備を備えた大型船であった。船室は「一等」、「特別三等」、「三等」からなり、このうち「特別三等」の客室は「従来の二等室を用ひ他線船舶の二等室と大同小異のもの」であると説明されている[10]。船賃はそれぞれ「一等」が片道三一ポンド、「特別三等」が一八ポンド、「普通三等」が六五円であり、その差は大きかった[11]。

当時の日本郵船の船舶の特徴については、石塚猪男蔵『現今渡米案内 附成業のしをり』（一九〇三年四月）

にも同様の記述が見られる。[12]

同社汽船は総て船体壮大にして客室の設備装置至れり尽せり 就中信濃丸加賀丸及び伊予丸は各六千三百噸余を有する構造堅牢の大船にして船体の動揺極めて少なく恰も陸地に座するの感を呈するのみならず其船室の完備は他に多く其比を見ず特に空気の流通に注意を加へ晴快此上もなし 尚一等室には暖室器抽斗附机の設けあり 喫煙室食堂等の如き亦善美至らざる所なし 又特別三等室と雖も丁度他船の二等室と大同小異にして乗客の快楽に資するの設備至らざるなし 三等室は空気の流通好き広濶にして清潔の場所に設けあり 且つ寝床の備付は二段板造りにて広く座して読書し得べく立ちて被服を用意し得べし 又海航中二三回の入浴湯あり 日用給水充分にして甚だ愉快を感ぜらる移民労働者の混乗三段麻布作りの寝床にて横臥の外起座に便ならず 臭気籠鬱頭痛を催す如き不快の皆無なる所此航線の特点なれば渡米者にとりて一方ならぬ幸便あり

さらに、食事についても「接待の一班一等客及特別三等客には美味の洋食を供し其一等客には望みにより時々和食を供すべし 三等客に対して滋養衛生に富める日本食を供すべし」と記されている。

一九〇一（明治三四）年一〇月二五日発行の『風俗画報』増刊「来客案内 郵船図会」は日本郵船を特集したユニークな号であるが、そこでは同社の船舶について詳しい紹介がなされている。書簡の中で荷風は「船中のライブラリーには小説類も少しは有之候。ハーデーの有名なるテスと申す小説及び例の椿姫の英訳を見出したれば折々読み申居り候。」と記し、トマス・ハーディ（一八四〇―一九二八）の代表作『テス』（一八九一）とアレクサンドル・デュマ・フィス（一八二四―一八九五）の『椿姫』（一八四八）の英訳を読んだと述べて

いるが、「来客案内 郵船図会」には、船内の談話室の設備について「備品の書籍は、自由に之を借覧するを得べし。目録一巻あり、通覧して、然る後、給仕を呼び、申込むなり。書籍の種目は、多く外国小説類なるが、又、和書の読切講談本もあり。」と紹介されている。[13]

また、「談話室には、墨汁、書簡紙、封筒の備付あるべし。客ありて、故郷の親族、遠国の朋友に音信を通ぜむとなれば、此室に来りて、書面を認むることを得べし。かくて船内に設けある郵便函に之を投ぜよ、事務員は寄港地に於て、之を郵便局に托するなり。」とあり、「用箋には、欧文にて日本郵船会社何丸と標記したるもの、甲乙二種あらむ、紙質を異にし、甲は郵便物として用ゐられ、乙は碇泊中他の船舶なる知友に委ね能ふめり。」と記載されている。[14] 実際に荷風は新出書簡を「NIPPON YUSEN KAISHA.」と記された用箋を用いて書いている。そして、ヴィクトリア港に寄港する際に、書き上げていた書簡を船内の郵便函に投じたものと推察される。

このように快適な船旅を過ごした荷風だが、一等船客として興味深い人物が乗船していたことを書簡で明らかにしている。

> 船客の中には柔道の大先生乗組み居り候、弘道館（ママ）の山下氏と云へば彼の社会にては知らぬものなき有名の達人なる由、氏は此度米国の鉄道王ヒル氏とやら云ふ大富豪の招聘により遠くワシントン府に赴くなりとの事にて候。天気よき折には甲板にて柔道の稽古あり一同弥次馬の飛入りをなす事も有之候。

「弘道館の山下氏」とは、嘉納治五郎（一八六〇―一九三八）の弟子で当時、講道館四天王と称された柔道家、山下義韶（よしつぐ）（一八六五―一九三五）のことである。山下は没後、講道館の歴史上初めて十段位を追贈された。ち

なみに、山下以外の三人は、横山作次郎、富田常次郎、西郷四郎であった。

山下の渡米については『東京朝日新聞』が一九〇三年九月一六日付の朝刊で「柔道師範招聘　警視庁柔道師範山下義韶氏は米国富豪サミユール、シル氏の招聘に応じ本月二十二日夫人並に助教師として門人河口三郎氏を随へ出発する由」と報じている。また、先ほど触れた「The Japan Weekly Mail」の「乗客欄」にも「Mr. and Mrs. Y.Yamashita.」とあり、一等船客として山下夫妻が信濃丸に乗船していたことが確認できる。[15]

ここでは、山下の渡米の軌跡を詳にした村田直樹の論考を参考にしながらその概略について述べたい。[16] 山下の渡米には次のような背景があったという。山下は一八八九（明治二二）年頃より慶應義塾の柔道師範の任にあったが、教え子の柴田一能が一九〇一年（明治三四）年九月にイエール大学に留学した際に、柴田は滞米中に知り合ったサミュエル・ヒル（Samuel Hill, 一八五七―一九三一）から自身の息子に武士道教育を施したいとの相談を受けた。サミュエル・ヒルは、アメリカのグレート・ノーザン鉄道会社（Great Northern Railway Company）の創業者ジェイムズ・ジェローム・ヒル（James Jerome Hill, 一八三八―一九一六）の娘婿で、自身も鉄道事業に関わり鉄道王と称された実業家である。柴田は柔道の師である山下にこのことを相談した。山下が嘉納に意見を求めたところ、嘉納はこれを柔道の海外普及の好機と捉え、山下のアメリカ行きを後押しした。こうして山下の渡米が実現した。これは講道館が海外に柔道師範を派遣した初めての事例となった。滞米中に山下は在米日本公使館で柔道の指導を行ったが、その際に公使館付き海軍武官の竹下勇中佐の仲介で当時、アメリカ合衆国大統領だったセオドア・ローズヴェルト（一八五八―一九一九）の知遇を得た。大統領は山下の門下生となり師弟の礼をとった。山下は海軍兵学校でも柔道の指南に当たるなど、山下夫妻の滞米生活は一九〇六（明治三九）年五月三一日に帰国するまで二年八ヶ月に及んだ。

このように、柔道の海外普及の歴史的な第一歩と荷風の渡米は重なっていたのである。荷風が山下と船上で

交流があったことは従来の研究では注目されていなかった事柄であり、荷風の洋行に関する新たな事実が明らかになったことになる。

三、渡米時の荷風の創作意識と滞米初期作品との関わり

荷風はアメリカに着いて約一ヶ月で短篇「船室（キャビン）夜話」を書き上げた（一九〇三年一一月執筆、『文藝倶楽部』第一〇巻第五号、一九〇四年四月掲載）。日本からアメリカに渡航中の船中の日本人の姿を描いた同作は『あめりか物語』に収録される際に巻頭に位置づけられた。滞米初期の荷風の創作意識を把握する上で重要な作品である。本稿では、新出書簡の内容と関連づけて「船室夜話」を捉え直したい。

「船室夜話」は、アメリカを目指して太平洋を航海する船の中で、一等船客と思しき三人の若者が船室に集い束の間の会話を交わすという話である。まず注目したいのが書き出しである。

> 何処にしても陸を見る事の出来ない航海は、殆ど堪へ難い程無聊に苦しめられるものであるが、横浜から亜米利加の新開地シアトルの港へ通ふ航海、此れも其の一ツであらう。
>
> 出帆した日、故国の山影に別れたなら、最う其れが最後、船客は彼岸の大陸に達する其の日までは、半月あまりの間、決して一ツの島、一ツの山をも見る事は出来ない。昨日も海、今日も海――何時見ても変らぬ太平洋の眺望と云ふのは、唯だ茫漠として、大きな波浪の起伏する辺に、翼の長い、嘴の曲つた、灰色の信天翁の飛び廻つて居るばかりである。其の上にも天気は次第に北の方へと進むに連れて、心地よく晴れ渡る事は稀になり、先づ毎日の様に空は暗澹たる鼠色の雲に蔽ひ尽さるゝのみか、動（やゝ）もすれば雨か霧

になつて了ふのだ。

私は今や計らずも此の淋しい海の上の旅人になつた。そして早くも十日ばかりの日数を送り得た処である。（下略）

横浜を出発して「十日ばかり」経った太平洋上の船中で物語は始まる。先述したように、荷風が船中で書簡の大部分を執筆したのも横浜を出帆してから十日程経ってのことである（九月二二日出港、一〇月一日に執筆）。つまり、作品内の時間と荷風が実際に書簡を綴っていた時間がほぼ一致しているのである。このことを踏まえる時、書簡の次の一節は重要である。

天気は横浜を発してより未だ一日とても晴れたる事は無之候。毎日曇天のみにて、時々霧深くなり、或は細雨朦々と降り籠め申候、かゝる時には船は吠ゆるが如き汽笛を吹きつゝ進む。是の笛の音云はん方なく裏淋しく御坐候。海は概して穏かなれども、折々波のうねり高く船の動揺する事有之候、斯る不穏の時、頭重く心地悪しきを忍びて甲板に出でゝ望めば、北太平洋は茫々として何等の目に入るものもなく、唯だ怪しき水鳥の片々するのみにして、常に曇れる灰色の空の下に巨浪高く漲り翻る有様実に壮快の極みに御坐候。

ここからは、書簡に綴られた船上での荷風の感慨と「船室夜話」の語り手「私」の描写が緊密に対応していることがわかる。書簡の記述が「船室夜話」の世界に反映されており、「船室夜話」が実際の荷風の渡航体験に基づいていることが浮かび上がってくる。例えば「船は吠ゆるが如き汽笛を吹きつゝ進む。是の笛の音云は

ん方なく裏淋しく御坐候」と書簡に綴った際の荷風の心境は、「船室夜話」の冒頭で「此の淋しい海の上の旅人になつた」と語る船上での「私」の心情と繋がっている。また、「吠ゆるが如き汽笛」の「音」は「船室夜話」の「其の時、吠える様な太い汽笛の響に続いて、甲板へ波の打上げる音がした」という表現に活かされている。

さらに、荷風は書簡の中で「此の手紙を書きつゝある今日は十月の一日にて候、船は已に一昨日の午前に百八十度の経度を越えて、西半球に進入り居り候。アルユーシアン群島に沿ふて、北緯五十度以北を航海しつゝあるなれば寒気は頗る甚しく、船室の中にても時には外套をまとひ居り候、幸ひに身体は健康なり、御安心下され度く候。」と、航海中の寒さについて印象深く書き記している。「船室夜話」でも洋上の寒さが物語の重要な要素を担っている。

先に引用した冒頭部に続いて物語は次のように進む。「今日あたりは余程気候も寒くなつて来た様だ。外套なしでは、到底甲板を歩いて喫煙室へも行かれまいと思ふ所から、私は其の儘自分の船室に閉ぢ籠つて、長椅子の上に身体を横へ、日本から持つて来た雑誌でも開かうかと思つて居ると、其の時室の戸を指先でコト〳〵と軽く叩くものがある。」。そうして、「全く寒いさねえ。アラスカの海を通るんだと云ふからな。」と口にしながら「私」の船室に入ってきたのが、航海中に懇意になった柳田という三〇歳過ぎの洋装の紳士である。つまり、アラスカの南を航海する船の中の寒さが、これから「私」の「船室」で繰り広げられる物語、「船室夜話」を導いていくのである。

「縞地の背広の上に褐色の外套を纏ひ、高い襟の間からは華美な色の襟飾を見せて居る」柳田は、時折「気取つた発音で」英語を交えてみせる「ハイカラ」な人物として描かれる。それとは対照的に描かれるのが、柳田の後に「私」の船室にやって来た岸本という「三十近く」の和服姿の男である。「紬の袷とフラネルの一重を重着した上に、大島の羽織を被つて居る」岸本が「洋服はどうも寒くて不可んですから」と話すと、柳田は

不審がり、「私なんぞは、然うすると全く反対ですね。増して此様航海中なんか日本服を着やうものなら、襟首が寒くて忽ち風邪を引いて了ふです。」と口を挟む。寒さに対する服装の捉え方の違いが、柳田と岸本の対照的な人物像を浮かび上がらせるのである。

そして、二人はそれぞれ渡米の経緯を語り始める。柳田は学校を卒業後、会社員となりオーストラリアに赴任したが、帰国すると「本社詰めの翻訳掛にされ」、期待外れの待遇を受ける。さらに、「洋行帰り」という経歴から自信を持っていた貴族の令嬢との縁談も失敗に終わる。これらの「苦痛の反動として、以前よりも一増(ママ)過激に島国の天地を罵倒し始めた」柳田は、折しも横浜の生糸商からのアメリカ視察の依頼を受け、「再び海外へ旅の愉快を試みやうと決心」する。

岸本もまた日本での不遇な環境から渡米を決意した人物である。岸本は「東京の或る会社に雇はれて居た」が、「何所の学校をも卒業した事がない」ために、「将来に出世する見込のないばかりか、何時も人の後に蹴落されてのみ居」るという境遇に置かれていたところ、「今度社内の改革に遇つて解雇され」てしまう。岸本には妻子がいたが、妻の反対を押し切り、アメリカの学校の「卒業免状」を持ち帰るために、妻の父の遺産を利用して渡米に踏み切ったのである。

このように、柳田と岸本は身なりや性格において対照的でありながら、二人とも当時の日本の社会において「立身出世」や「成功」が叶わなかった人物として描かれていることがわかる。この点について、末延芳晴[17]は「二人は、共に日本の競争社会の中で失敗していること、にもかかわらず、アメリカに渡ることで敗者復活戦に挑もうとしている点で共通している。そして、どちらも、敗者復活戦を勝ち抜くための「エース」として、日本に対しておのれの優越性を主張できる「記号（肩書き）」を必要としている」と指摘している。その上で、「一人だけ自らについては黙して何も語らなかった「私」、つまり、ただ旅の中で「書く」ことだけを考えて、信

濃丸に乗った永井荷風」の存在に着目し、そのような「おのれ自身の「記号」的特性を明らかにしない」ことによって、「世界が、外部が、他者が本来の姿を現わすのを待つという荷風の文学的生涯を貫く独特の戦術的姿勢（ポーズ）と小説技法の萌芽」を「船室夜話」という作品に看取することができると述べている。

末延の指摘するように、「船室夜話」の構造で重要なのは、最後まで自身の経歴については語らず、二人の渡米者の物語に耳を傾ける語り手「私」の在り方である。[18] このような指摘を踏まえつつ、本稿では「船室夜話」の「私」の在り方を新出書簡の記述と関連づけて考察してみたい。その際に着目したいのが『文藝倶楽部』に掲載された初出本文である。

『あめりか物語』所収の「船室夜話」の本文では、「雑談会」が終わり、柳田と岸本がそれぞれの船室に帰っていくところで物語が閉じられるのだが、初出本文では、その後、船室に一人となった「私」が「二人の身上話」について「二個の長い小説をば一度に読了した様な心持」になったと語る場面が描かれているのである。

太平洋上の今夜は此の如くして送り尽さるゝのである。私も最早やベッドに横はるより外、決して為すべき事は無い。けれども、今私は少時の間、以前の如く長椅子の上に身を凭せ掛けた儘、絶えざる荒海の音楽を聞きつゝ、或る興味深き空想に耽らざるを得なかつた。

それは深くも耳の底に残された二人の身上話である。一人は己れの才能と経歴を余りに多く思過ぎた為めに、望むが如き愉快を生れ故郷の地に得る事の出来なかつた独身の才子、一人は切なる妻の愛情を振捨てて学問と肩書とを買ひに行く若い夫。…何の事はない私は強く刺撃された感興を以て、二個の長い小説をば一度に読了した様な心持である。然し、其れは何れも未完のもので有らねば成らぬ。とすれば、彼等が新開の世界に於ける、そして又帰国してからの後篇は如何に成り行くものであらうか。

運命の神――不可知の大作者！　願くは此等の活小説の結末をば、軈て目出度い大団円のもので有らしむる様に……！　私は風雨烈しき一夜を太平洋上に送り得た此の日の日記に、此の如く書き付くべく、寝床へ這入る前に先づ机の上のペンを取り上げた。

ここに描かれる柳田と岸本に対する「私」の眼差しは、作家としてのそれと一続きのものであるといえよう。そして、それは、新出書簡で「船中にてさま〴〵見聞する処のもの中々小説の材料となるもの多く有之候」と綴る荷風の眼差しと重なっている。新出書簡には続けて次のように記されている。

小説的と云へば北米へ出稼に行く三等船客の生涯なるべし。彼等の中には已に白髪の老人あり、人相悪しき大男あり、ハイカラーあり、職人あり、風俗は千差万別なれども、要するに一個空漠たる野心にかられて故郷の地を去りしものにて候。彼等の身の上話は是れを其の侭筆記したる丈けにても已に立派なる小説に有之候。実にパンを得んとする人生の戦ひ程惨憺なるものは無之候。

ここからは荷風が渡航中にすでに作家の眼差しをもち、それを通して三等船客の姿を掬い上げようとしていたことが読み取れる。荷風は自らの洋行体験を文学の対象として捉えていたのである。そして、こうした「北米へ出稼に行く三等船客」への荷風の「小説」的関心は、アメリカに滞在して程なくして執筆される「舎路港の一夜」（『文藝倶楽部』第一〇巻第七号、一九〇四年五月）や「夜の霧」（一九〇三年一一月執筆、『文藝界』第三巻第八号、一九〇四年七月）といった作品に結実するのである。前者はシアトルの日本人街を、後者はタコマを舞台としており、両作とも日本からアメリカに渡った出稼ぎ労働者の過酷な実態を描いている。

一五

さらに、アメリカでの成功を夢見て夫婦でシアトルに渡ってきた日本人出稼ぎ労働者の悲劇を描いた「野路のかへり」では、「北米へ出稼に行く三等船客」への荷風の眼差しが文学表現として実現している。[19]

出稼ぎの労働者と云ふ一語は、又しても私の心を動さずには居ない。思返すまでも無く、過る年故郷を去つて此の国に向ふ航海中、散歩の上甲板から、彼等労働者の一群を見て、私は如何なる感想に打れたか。

彼等は人としてよりは寧ろ荷物の如くに取扱はれ、狭い、汚い、臭い、穴倉の中に満載せられ、天気の好い折を見計つては、船の底からもく〳〵甲板へ上つて来て、茫々たる空と水とを眺める、と云つて心弱い我等の如く、別に感慨に打るゝ様子もなく、三人四人、五人六人と一緒になつて、何やら高声に話し合つて居る中、日本から持つて来た煙管で煙草をのみ、吸殻を甲板へ捨て、通り過ぎる船員に叱責せられるかと思ふと、やがて月の夜なぞには、各自の生国を知らせる地方の流行唄を歌ひ出す。私は彼等の中に声自慢らしい白髪の老人の交つて居た事を忘れない。

彼等は外国で働く三年の辛苦は、国へ帰つて有福な十年を作る楽の種であると云ふ、この望み一つで、自分の先祖が産れて而して土になつた畠を去り、伊太利の空よりも更に美しい東の天に別れ、移民法だの健康診断だのと、いろ〳〵な名目の下に行はれる幾多の屈辱を甘受して、此の新大陸へ渡つて来るのである。

然し、この世は世界の何処へ行かうとも、皆な同じ苦役の場所である。彼等の中の幾人が其の望みを達し得るのであらうと、色々な物悲しい空想の湧起るにつれて、私の目には今まで平和と静安の限りを示して居た行手の牧場は、忽ち変じて云はん方なき寂寥を感ぜしめ、松の森林は暗澹として奥深く、恐怖と秘密の隠家である様に思はれた。

このように、「野路のかへり」では三等船客の姿がしっかりと捉えられている。二〇世紀に入ると日本人渡米者の数は急激に増える。その多くは日本での暮らしに窮迫した人々である。彼らは成功を夢見て渡米したが、実際に成功をつかむことのできた者は一握りだった。渡米ブームの影には、アメリカで過酷な現実に直面した数多くの日本人出稼ぎ労働者の姿があった。荷風は渡米前の自らの作風について「其の頃の私の作品と云へば、凡てゾラの模倣であつて、人生の暗黒面を実際に観察して、其の報告書を作ると云ふ事が、小説の中心要素たるべきものと思つて居た」（「吾が思想の変遷」、『新潮』第一一巻第四号、一九〇九年一〇月）と述べているが、この作風のもとで日本からの出稼ぎ労働者の姿を描き出そうとしたのである。

確かに、「船室夜話」で描かれた一等船客の抱える将来の不安と三等船客のそれとは同じものではないだろう。しかし、荷風にとって、日本社会で不遇に甘んじ新大陸に希望を託して渡米する両者の姿は、そこに経済的環境の違いはあるにせよ、ともに文学の「対象」として捉えられていたのである。そして、荷風はそのような渡米者の姿を日本で影響を受けたゾライズムの手法で描き出した。このように、新出書簡によって明らかにされる渡航時の荷風の創作意識は滞米初期の荷風の作品と深く結びついているのである。

四、アメリカにおける荷風の創作意識の変化

本稿ではここまで、渡航中に綴られた新出書簡と渡米後まもなく執筆された作品を関連づけて考察することで、当時の荷風の創作意識を明らかにしてきた。そこから浮かび上がってきたのは、荷風の作家としての眼差しと、その眼差しの対象をゾライズムの手法のもとで描くという創作意識であった。

しかし、荷風はアメリカに滞在してから徐々にこれまでの作風に限界を覚え、やがて深刻な創作不振に陥る

ことになる。荷風はその時の煩悶を「亜米利加に来りてより余が胸裏には藝術上の革命漸く起らんとしつゝあるが如し。近時筆を執れども一二行すら満足には書き能はざる蓋此の如き思想混乱の結果たらずんばあらず」（「西遊日誌抄」、一九〇四年一月五日）と日記に書き残している。荷風はもはや自らの異郷体験を文学として昇華することが困難になっていたのである。

こうした芸術的煩悶の中で、荷風は試行錯誤を重ね、自らの感性に合った新たな文学を見出していくのである。荷風は「吾が思想の変遷」のなかで滞米時代のことを次のように振り返っている。

外国の見慣れぬ風物とか、境遇の寂莫とかが、凡て書物を離れて自己特有の感情を造つて呉れた。又今迄自覚しなかつた自分の性状を深く意識させた。従つて今までは何処か窮屈に思ひながらも矢張り囚はれて居たゾラの主義から脱して、右に左自分は自分だけの感じた所を無頓着無忌憚に書き現はすやうになつた。これは何も私が殊更好んで遣つたと云ふ訳では無く、前にも云つたやうに其の境遇が自然に及ぼした感化である。

また、木曜会同人の生田葵山に宛てた当時の書簡の中で荷風は次のように書き記している。

僕は矢張自然主義で行きたいと思つて居る。然しゾラは余りに科学を尊び過ぎて居る。彼は藝術（アート）なるものを認めない――彼は人から自分をアーチストと云はれる事を快しとしなかつた。と云ふに至つては余に極端だと思ふ。（中略）ゾラは極端だよ。然しモーパツサン、ドーデーあたりの筆つきは僕の模せんとする処だ。（生田葵山宛、一九〇四年四月二六日）

ここからは、ゾラからモーパッサン、ドーデーに荷風の関心が移っていく様子が見てとれる。しかし、葵山宛の別の書簡では「余はオペラを見ればオペラを作りたいしローマンスに接するとローマンスに筆を取りたくなる。さうかと云つてフローベルなぞの自然主義に触れると又其れも書いて見たい。思想混乱して遂には何が何やら分らなくなつてしまふ。（中略）東西の趣味思想共に混乱して目下は短篇の趣向すら満足に空想する事ができない」（一九〇四年二月二七日）と綴られてもいるように、荷風の「思想混乱」は、ゾラからモーパッサンへの移行といった狭義のフランス文学の影響によって理解される単純なものではない。それは、多岐にわたる文学・芸術の受容、自己の生に関わる思想的な煩悶、自然との交流を通した感性の変容といった、より広範な異郷体験のもとで意味づけ直される必要がある。

そのことは木曜会同人宛の全集未収録書簡（一九〇四年八月下旬〔推定〕）に窺うことができる。[20] この書簡は一九一九（大正八）年五月一日発行の『手紙雑誌』第二巻第五号に「淋しき旅の空」の題で掲載されたが、荷風はその中で「煩悶とか懊悩とかは頗る荷風的ならずと云ふ」も「事実余は淋しき旅の空を仰ぎたりし以来、頗る荷風的ならざる煩悶懊悩を感ずるに至りしを如何にせん」と胸の内を明かした上で、「余の此の如く筆取る事能はざりしは、此れ思想攪乱の結果なるなり」と述べている。また、それが人生の問題にまで及んでいたことは「境遇の激変したるが為めなり、今迄覚えたる事なき孤寂に襲はれたる為めなり、ホームシックにて健康を侵されたるが為めなり、人生問題の簇々とし胸中に湧起りしが為めなり。懐疑と虚無の不安に脅されしが為めなり」という言葉に見てとれる。さらに荷風は、「思想混乱」の克服の契機について次のような重要な指摘をしている。

此の時、余の弟は姉崎博士の「復活の曙光」を送り来れり。余は博士の神秘主義及び宗教に関する意見を

一九

読みたり。同時にメレヂコウスキーの「人物及藝術家（マン・エンド・アーチスト）としてのトルストイ」と云ふ書を読みたり。余はいたく感動したり。（中略）恰も好し、此の以前に於て余はワグネル楽劇の筋書（ストーリー）を読み、稍ワグネル楽劇の何物たるを解せんとしたる時なりし故、以上の三書は、一個の新しき思想を余の胸中に注ぎ来れり

ここに挙げられる三書は書簡の末尾で荷風に「ゾラ以外の思想」と名指された。タコマ時代の「思想混乱」のなかで、荷風は三書との対話を通して「一個の新しき思想」を自らのものにしていくのである。[21]

こうした煩悶と創作不振を乗り越えて書き上げられた作品が「岡の上」（『文藝倶楽部』第一一巻第八号、一九〇五年六月）である。一九〇四年一〇月、荷風は約一年を過ごしたタコマの地を離れ、万国博覧会を見学するためにミズーリ州セントルイスに一ヶ月程滞在した後、ミシガン州カラマズーに移り住んだ。そして、カラマズーで新たな生活を始めて約一ヶ月、「岡の上」を書き上げた。同作の完成が荷風にとって大きな意味をもっていたことは、「短篇小説「岡の上」を脱稿し得て木曜会に寄す。」（「西遊日誌抄」、一九〇四年一二月二八日）と、脱稿の日付が明記されていることに窺うことができる。

「岡の上」は、アメリカの田舎町の大学にやって来た日本人学生の「私」が、大学で知り合った渡野というもう一人の日本人から身の上話を聞くという内容の作品である。日本で「放蕩生活」を重ねた渡野は、「浮世の快楽」を断ち切るために敬虔なキリスト教信者の看護婦と結婚するが、まもなく結婚生活に堪えられなくなり、単身で渡米する。「持前の懐疑思想を打破り、深い信仰の安心を得たい」がために、渡野は「殊更選んで辺鄙な田舎」を選び、「宗教生活」を送ろうと試みるが、ついに宗教に救いを見出しえず、「私」にその地を去ることを告げて物語は閉じられる。

このように、「岡の上」はキリスト教の信仰をめぐる宗教的葛藤を主題としている。これは、「船室夜話」、「夜の霧」、「舎路港の一夜」といった、それまでの滞米時代の作品には見られなかったテーマであり、そこには滞米初期の荷風の創作意識の変化を認めることができる。荷風は異郷での思想的、文学的彷徨を通して、そのような「煩悶」自体を主題とする「岡の上」という文学作品を生み出すことによって、滞米初期の創作不振を乗り越えていったのである。

注

(1) 末延芳晴『荷風のあめりか』、平凡社、二〇〇五年一二月、一七頁。

(2) 「西遊日誌抄」は『文明』(一九一七年四月―一〇月)に六回にわたって掲載された後、加筆修訂を経て『断腸亭雑稾』(籾山書店、一九一八年一月)に収録された。その後、フランス滞在期の記述が増補され元版『荷風全集』第二巻(春陽堂、一九一九年六月)に収録された。

(3) 伊狩章『新訂 後期硯友社文学の研究』、文泉堂出版、一九八三年一〇月、二〇一―二〇三頁。同書によれば、一九〇〇(明治三三)年には荷風は清国出身の蘇山人(別号・羅臥雲)に誘われて木曜会に参加していたとされる。

(4) 武田勝彦『荷風の青春』(三笠書房、一九七三年三月、一三頁)、秋庭太郎『荷風外伝』(春陽堂書店、一九七九年七月、四六頁)、末延芳晴『荷風のあめりか』(前掲、二二頁)など。

(5) 宮永孝「荷風とモーパッサン」、『社会志林』、第五八巻第四号、二〇一二年三月、二六三頁。「乗客欄」には「Mr. S. Nagai in second class」と記されている。なお、同論文では、この英字新聞の日付が一九〇三年九月二三日となっているが、稿者があらためて同紙を調査したところ、同年九月二六日付の紙面であることが確認された。

(6) 「The Japan Weekly Mail」一九〇三年九月二六日付の「乗客欄」には、一等船客として「Mr. Imamura」の名が確認できるが、これは荷風が航海中に友誼を結んだ今村次七と推測される。武田勝彦の前掲書(二二―二三頁、三二―

三九頁）によれば、今村は石川県金沢で米穀取引や金融業など手広く商売を手掛けていた名士の家に生まれ、農工銀行、大阪商船に勤務した後、妻子を日本に残して渡米した人物である。美術や文学に造詣が深く、また妻・照子の兄が美術評論家として活躍していた岩村透であったこともあり、今村は荷風と相通じるところ多く、二人は渡航後も親交を保った。今村のキングストン滞在時には荷風が今村の下宿先を訪れ二週間程生活を共にした（同書、一四三―一五六頁）。帰国後も二人の交流が続いていたことは、『断腸亭日乗』の「今村次七君金沢より出京、断腸亭を訪はれ浮世絵の事を談ぜらる。」（一九一八年二月一三日）、「午後金沢の今村君来り訪はる。其の令嬢今年二十二歳となり洋行したしと言居らる由を語らる。余往年今村君と米国の各地を漫遊せし当時の事を思へば夢の如き心地す。」（一九二〇年九月三日）、「午後金沢市今村次七君来り訪はる。米国遊学の旧事を語り合ひて日の暮るゝを忘る。」（一九二三年五月一六日）などの記述から窺い知ることができる。

（7）宇佐美昇三『信濃丸の知られざる生涯』、海文堂、二〇一八年五月、四〇―四二頁。

（8）日本郵船株式会社総務部弘報室編『七つの海で一世紀　日本郵船創業一〇〇周年記念 船舶写真集』、日本郵船株式会社、一九八五年一〇月、三六頁。

（9）一柳松庵編『増訂 渡米之栞』第四版、掃葉軒蔵版、著作兼発行者・一柳譲二、印刷者・熊田宜遜、一九〇四年一二月、四二―四三頁。

（10）一柳松庵編『増訂 渡米之栞』第四版、前掲、四三頁。荷風は書簡の中で「三等で行くなぞと申し居り候ひし」と記しているが、ここでいう「三等」が三等船室ではなく、二等船室に相当する「特別三等」を指している可能性もある。

（11）一柳松庵編『増訂 渡米之栞』第四版、前掲、四六―四七頁。

（12）石塚猪男蔵『現今渡米案内 附成業のしをり』、発行者・石塚猪男蔵、印刷者・矢野松吉、発売所・石塚書店、一九〇三年四月、八七―八八頁。

（13）「来客案内 郵船図会」、『風俗画報』増刊、第二三九号、一九〇一年一〇月二五日、一六頁。

（14）「来客案内 郵船図会」、『風俗画報』増刊、前掲、一五―一六頁。

(15) 宇佐美昇三は『信濃丸の知られざる生涯』(前掲、四三―四四頁)において、『シアトル・サンデー・タイムズ』(一九〇三年一〇月一一日付及び一八日付)の記事から山下義韶とその家族が信濃丸でシアトルに到着したことが確認できると指摘している。

(16) 村田直樹「講道館柔道の海外普及に関する史的研究　山下義韶の米国行」、第一五輯、二〇一五年、一―一三頁。

(17) 末延芳晴『荷風のあめりか』、前掲、三一―三二頁。

(18) この点について、日比嘉高は「船室夜話」が「〈雑誌『文芸倶楽部』の一雑報欄記事〉」であることに着目し、同作が「小説としてよりもむしろ米国に旅する人物の見聞録としての性格を強く示していたはずである」と指摘した上で、そのような視点から初出本文を捉え直すことで、二人の渡米者の姿を眺める「私」の「傍観者性」も危うさを内包していることが読みとれると考察している(『ジャパニーズ・アメリカ　移民文学・出版文化・収容所』、新曜社、二〇一四年二月、五六―六六頁)。

(19) 「野路のかへり」は「強弱」の題で『太陽』(第一二巻第二号、一九〇六年二月)に発表された後、『あめりか物語』に収録される際に同題に改題された。

(20) この書簡の内容とその考察については、岸川俊太郎「一九〇四年の永井荷風　新出書簡をめぐって」(『三田文学』、第一一四号(夏季号)、二〇一三年八月)を参照されたい。

(21) この点については、岸川俊太郎「滞米初期における永井荷風の「思想混乱」の解明に向けて―姉崎嘲風、ワーグナー、メレシコフスキイの同時代受容の分析を通して―」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊二四号―一、二〇一六年九月)を参照されたい。

＊　永井荷風の著作からの引用は、原則として『永井荷風全集』(全三〇巻＋別巻、岩波書店、第二刷、二〇〇九年四月―二〇一一年一一月)に拠ったが、「船室夜話」は初出誌『文藝倶楽部』に拠った。引用に際しては現行の字体に改め、ルビは適宜省略した。

〔付記〕本稿は、第一四回市川・荷風忌（二〇二二年五月三日、市川市文学ミュージアム）における講演に基づいています。席上ご意見いただいた方々に御礼申し上げます。

〔謝辞〕巌谷小波宛永井荷風書簡の閲覧及び翻刻の掲載については千葉県市川市文学ミュージアムにご快諾いただきました。また、同ミュージアムの増田裕子氏には格別のご配慮を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

【資料】新出　永井荷風書簡（巌谷小波宛）〔市川市文学ミュージアム蔵〕

翻刻　岸川俊太郎

［年次］

一九〇三（明治三六）年一〇月五日〔サンフランシスコ消印一〇月九日〕〔東京消印一一月二日〕

［封筒］

東京麹町一番町十三　巌谷季雄様

S.Iwaya Esq. Tokyo. Japan. Via S. Frisco.〔封書〕

［本文］

拝呈、出達の際はわざ〳〵新橋までお送り下され有難く存じ候。横浜にて信濃丸甲板上に春浪子と手を別ち候ふ時には一種異様なる感覚を経験致し候。是等を人生別離の情とでも申すなる可きか。

されどいよ〳〵波止場を離れ候ふてよりは寧ろ気軽く愉快なる心地と相成り、面白き前途の空想にのみふけり申候。船中に於ける小生の生活は愉快に且つ贅沢なるものに有之候。最初は三等で行くなぞと申し居り候ひしが、船へ行つて見ると、事務長始め其の他の者も皆丁重に待遇し呉れる為め、否応なく上等船客と相成り申候。且つ其の上にも此の船の事務長は以前よりの知己なりしを以て何かに便利多く、此の人の紹介にて小生は船客諸氏とも直ぐ懇意になり、毎日食堂喫烟室等にて愉快なる談話をなす（小生の花柳談もなか〳〵の愛嬌となり居れり。）其れが為めか、小生は日本に居る時よりも聊か交際的の人物に相成りしが如き心地致され候、或夜の如きは音楽室にて尺八の一曲を吹奏し、一同無聊に苦しむ折の事とて意外なる賞賛を博したる事も有之候。猶余る船客の中には柔道の大先生乗組み居り候、弘道館（ママ）の山下氏と云へば彼の社会にては知らぬものなき有名の達人なる由、氏は此度米国の鉄道王ヒル氏とやら云ふ大富豪の招聘により遠くワシントン府に赴くなりとの事にて候。天気よき折には甲板にて柔道の稽古あり一同弥次馬の飛入りをなす事も有之候。

さて、船中にてさま〴〵見聞する処のもの中々（なか〳〵）小説の材料となるもの多く有之候。西洋婦人の立派な服装を見て何処の貴婦人かと思へば、香港より乗込める娼妓の由、瞠々たる風采にて太平洋を股にかけ北米へ出稼ぎに行くなるべし。彼の日本醜業婦が細帯一ツにて犬か豚同様の姿にてスゴ〳〵海外へ密航するに比較すれば実に雲泥のチガイと云はざるべからず。自然と何等かの感慨に沈められ可く候。小説的と云へば北米へ出稼に行く三等船客の生涯なるべし。彼等の中には已に白髪の老人あり、人相悪しき大男あり、ハイカラーあり、職人あり、風俗は千差万別なれども、要するに一個空漠たる野心にかられて故郷の地を去りしものにて候。彼等の身

二五

の上話は是れを其の侭筆記したる丈けにても已に立派なる小説に有之候。実にパンを得んとする人生の戦ひ程惨憺なるものは無之候。

此の手紙を書きつゝある今日は十月の一日にて候、船は已に一昨日の午前に百八十度の経度を越えて、西半球に進入り居り候。アルユーシアン群島に沿ふて、北緯五十度以北を航海しつゝあるなれば寒気は頗る甚しく、船室の中にても時には外套をまとひ居り候、幸ひに身体は健康なり、御安心下され度く候。

天気は横浜を発してより未だ一日とても晴れたる事は無之候。毎日曇天のみにて、時々霧深くなり、或は細雨朦々と降り籠め申候、かゝる時には船は吠ゆるが如き汽笛を吹きつゝ進む。是の笛の音云はん方なく裏淋しく御坐候。海は概して穏かなれども、折々波のうねり高く船の動揺する事有之候。斯る不穏の時、頭重く心地悪しきを忍びて甲板に出でゝ望めば、北太平洋は茫々として何等の目に入るものもなく、唯だ怪しき水鳥の片々するのみにして、常に曇れる灰色の空の下に巨浪高く漲り翻る有様実に壮快の極みに御坐候。

船中のライブラリーには小説類も少しは有之候。ハーデーの有名なるテスと申す小説及び例の椿姫の英訳を見出したれば折々読み申居り候。会話は未だ一向駄目にて西洋人の前では唖同然に有之、何でも「イエース」と「ノー」ばかりで持切り居り候。最う後一週間程にてヴイクトリヤへ着く可く候。

……　十月一日午後

船中にて……

其後は為す事もなく船中にてぶら〳〵と遊び暮し原稿を書く様な気にはならず、唯だ日の過るをのみ楽しみ居り候。猶ほいろ〳〵と御報道申すつもりの処、最早や今日の夜十一時頃にはヴクトリヤに着し、其より一夜を明かして翌日には直ちにシヤトルへ到着するよしにて船中は何となくざゞめき、心忙しく御坐候へば此れにて

免蒙り候、上陸致し候ふ上にて又々手紙差出すべく候。

……　十月五日夕

ヴヒクトリヤ入港の際（ママ）

荷風生

小波先生

木曜会諸君

二七

永井荷風の渡米
――新出・船中書簡を通して――

岸川俊太郎

要　旨

永井荷風は1903(明治36)年9月22日に横浜港を出発し,10月5日,カナダ・ヴィクトリア港に到着,7日にアメリカ・シアトルの地を踏んだ。1907(明治40)年7月にフランスに渡航するまで,荷風は3年9ヶ月余りをアメリカ各地で過ごし,異郷での体験に基づいた数多くの作品を創作,発表した。荷風の洋行の特徴は,荷風が自身の洋行を作家の眼差しで捉えていた点にある。荷風の異郷体験と作品創作の間には密接な関わりがあるといえる。本稿では,航海中に書かれた荷風の新出書簡を手掛かりに,これまで不明瞭な点が残されていた渡米時の荷風の行動や心境を明らかにする。その上で,新出書簡の内容と渡米後まもなく執筆された作品を関連づけて考察することで,当時の荷風の創作意識を捉え直したい。